

身体教育という考え方

ースポーツ文化からのアプローチー

Inoue Kuniko

井上 邦子

奈良教育大学 保健体育講座

身体教育という考え方

ースポーツ文化からのアプローチー

奈良教育大学 保健体育講座 井上 邦子

1. はじめに～「保健体育」とは

保健体育とは、幼稚園、保育園で行われる運動遊びをひとくくりに考えていいのなら、幼・小・中・高、ときには大学まで我々が非常に長期にわたって教育を受けることになる教科といえるでしょう。さらに「学習指導要領」（文部科学省が各教科の目標や内容などの基準を定めたもの）には、保健体育は「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる」ことを目的としていることが記されています。学校を卒業した後も運動を実践できる態度を育てることを役割としているところが、この教科の大きな特徴の一つといえるでしょう。これほどまでに私たちの一生とかかわる教科ですが、ではいったい何を学ぶものなのでしょうか？当たり前だと思っていることを改めて考えてみる、これが大学での勉強の醍醐味でもあります。

そもそも体育が教科名となったのは戦後のことですが、その元になるのは明治期に日本にもたらされた“Physical Education”という英語です。直訳すると「身体教育」ということになります。この“Physical Education”という言葉の広がりを考えてみれば、「体育＝スポーツを単に実践するだけの教科」ではなさそうです。「身体を通じた身体の教育」を目指しているといえるかもしれません。しかも、それを生涯にわたって実践できることをめざしています。そうした広い意味が含まれている学びであることを、まずは押さえなければいけません。

では保健体育とは何を学ぶ教科なのか——これに答えるためには、色々な分野からアプローチすることができます。保健体育の分野は、運動生理学、運動学、保健体育科教育、スポーツ社会学、保健、体育哲学（原理）など様々な領域から成り立ち、色々な角度から論じることができます。その中で、本論では筆者の専門分野に即して考えていきたいと思えます。

2. 人間にとってスポーツとは？

ところでスポーツとは人間にとって何でしょうか？保健体育の教科が、運動やスポーツを通じて学ぶことを特徴とするのであれば、私たちは運動やスポーツから何を学ぶのでしょうか。

ただ、ここで使う「スポーツ」という語ですが、広い意味で使うことを、まずはお断りしなくてははいけません。私たちは、「スポーツ」と聞けば、サッカーやバレーボールなどいわゆる「競技スポーツ」や「オリンピック競技」を思い浮かべることが多いと思えます。こうした考え方は間違いではないですが、限定的な言葉の使い方といえるかもしれません。ためしに手元の国語辞典で、是非「スポーツ」という語彙を引いてみることをお勧めします。筆者の手元の辞書には「余暇活動・競技・体力づくりのために行う身体運動。陸上競技・水泳・各種球技・スキー・スケート・登山などの総称」¹⁾とあります。競技をスポーツと呼ぶことに何の違和感がないにしても、余暇活動や登山、体力づくりなどをスポーツに含めて考えるということは、普段あまり意識しないかもしれません。国語辞典ですらこのようにスポーツを広くとらえています。さらにスポーツ人類学やスポーツ文化論などの専門分野などでは、舞踊や子どもの遊びなども、まずはスポーツ文化の領域に含めて考える傾向にあります。こうしてスポーツを広義にとらえることによって、より広い視野から人にとってスポーツとは何かを一層深く考えられると思えます。本論でもスポーツをこうした広義の意味に解釈することにしたいと思えます。

それでは、話を元に戻しましょう。スポーツは人にとって何なのでしょう。スポーツは人類の誕生とともにあると言われていています。人が文字を使う以前のいわば先史時代から、広義のスポーツは行われていたと考えられます。言い換えれば、人がスポーツをしなかった時代はなかったといえます。

例えば、オリンピア祭典競技（古代オリンピック）は紀元前9世紀ごろから行われていたと考えられ、競走や幅跳び、円盤投げ、やり投げ、ボクシングやレスリングなどが行われていました。また、太古に描かれた壁画にも多くのダンスのモチーフが見受けられます。例えばアルジェリアのタッシリ・ナジェール高原にある壁画は、8000年以上前に描かれたと考えられているのですが、そこには躍動的なダンスが生き生きと描かれています。我が国でも古事記にはアメノウズメノミコトの踊りが出てきますし、日本書紀には当麻蹶速（タイマノケハヤ）と野見宿禰（ノミノスクネ）が取ったとされる「相撲」も出てきます。こうした事例は、いつの世もスポーツが人と共にあったことを物語っています。

現代の我々は、こうしたスポーツを体力の維持増進や、ストレス発散のために行うことが多いですが、伝統的なスポーツをみてみると必ずしもそうした日常的な機会に行ってきただけではありません。たとえば年に一度の機会——例えば田植え祭りや神社の秋祭り——に、スポーツを「儀礼」として行ってきた伝統があります。現在でも、毎年12月に行われる奈良の春日大社おん祭で、競馬や流鏝馬、相撲などが伝承されているのも、そうした事例の一つです。

では、こうした「儀礼の中のスポーツ」はなぜ行われてきたのでしょうか？こうした事例を見ることは「人にとってスポーツとは何か？」の一つの答えを与えてくれるはずです。

3. モンゴルの伝統スポーツ～相撲～

「人にとってスポーツとは何か」——この問いを考えるために、筆者は、モンゴル国をフィールドとして研究を行っています。モンゴル国では、相撲が最も国民の人気を集める競技です。日本の相撲とは異なり土俵はなく、足の裏と手のひら以外が地面につけば負けとなります。土俵からの「押し出し」がないため、組み手争いが長時間にわかって繰り広げられることもあり、一つの取り組みがとても長いということが特徴です。

この競技が最も盛り上がる機会は、年に一度夏に行われる「ナーダム」という祭りのときです。「ナーダム」というのは、モンゴル語で「遊び」という意味の言葉ですが、もともとは土地の神に祈りをささげる儀礼として行われていたと考えられています。このナーダムは、地方で勝ち抜いた者が、首都で行われ

る全国大会へと出場できるという仕組みになっています。首都のナーダムでは、国の選りすぐりの猛者たちが集うことを特徴とすれば、その予選も兼ねている地方の大会は、どちらかと言うと村の男性だれでもが参加するとても素朴な相撲を楽しむ場です。

モンゴル語で力士のことは「ボフ」といいます。日本語の大相撲の「力士」は、いわゆる職業を示す言葉ですが、「ボフ」はそうした「特別な職業」を指す言葉ではなく、「力持ち」という特徴を指すような、そんなニュアンスがあるように感じます。日本の大相撲の力士は基本、相撲で生計を立てる「プロ」ですが、モンゴルの力士は伝統的には「プロ」ではありません（最近の傾向としては、プロも増えてきましたが、地方のボフはプロではない人も大勢います）。モンゴルで相撲をとったことがない男なんていない、男なら相撲の得意な技の一つや二つはもっている——モンゴルの人には皆同様にこう表現します。こうした言葉は、モンゴルと日本の相撲文化の広がりの違いを表すでしょう。日本では相撲をとったことがある人はどれくらいいるのでしょうか？

では、モンゴルの地でボフが相撲をとるということはどういうことなのでしょう。モンゴルにおいて相撲は「自然の神様」にささげる儀礼でもあります。自然の神様を相撲で喜ばせ、自然の恵みを約束してもらおうという大切な意味もあります。ただ、そうした意味だけで相撲を語ることは十分ではないでしょう。



モンゴル相撲の力士たち

4. 身体を介した共感

モンゴルはよく知られているように、遊牧を文化の基盤として成り立っています。今日では、遊牧生活から離れ定住する人が増え、都市化が進みましたが、まだ暮らしの基盤には遊牧社会の伝統が残っています。こうした遊牧の暮らしは、家畜という生き物と厳しい自然（時には気温がマイナス 30 度を下回ることもあり、雪害など乗り越えなければならない自然災害が多く存在します）を相手に、生き抜いていかなければならない暮らし方です。すなわち、自分の努力だけではどうにもならないものばかりを相手にしなくてはならないということです。

そうした環境で自分と家族と家畜を守り、生き延びるためには、人のつながりが何よりも大切になるでしょう。遊牧社会では、自由気ままに土地を「流浪」して家畜を育てているというイメージがあるかもしれませんが、実はそうではありません。自分の家畜を放牧するエリアが大まかに決まっています。しかし、そのエリアが、年によって草の生え方が劣っていたりすることもあるはずです。そうしたときに、自分の土地に他家族を招き入れて、お互いが助け合って遊牧生活を成立させるということが日々行われています。また、馬の調教に長けた人や力持ちが他の家族に駆り出されて、遊牧作業を手伝うことは珍しいことではありません。これらは昔から行われている伝統的な助け合いの制度です。こうして、遊牧民はお互いを助け合って、受け入れあって暮らしを成り立たせてきました。



草原の中に立つ白いゲル（移動式住居）

そうして、同じ厳しい自然を生き抜く者同士として、一年一度の機会に相撲をとるのでしょう。相撲は、相手に何としてでも勝とうと躍起になることで勝てるようなものではないはずです。「勝利」にこだわっている時点で、自分の身体は十分に動かず、身体を固くするだけです。それよりも、相手が技を繰り出そうとするその瞬間の「直前」（これが大切です）にそれを素早くかわし、逆に相手を倒すことが必要だといえます。相手が技を掛けてきたのを目で確認してから、それをかわしているようでは、遅すぎます。相手が動き出すその直前を察知する「感性」がものをいいます。



これを言い換えると、相手の身体や心の動きを敏感に察知する「感性」がよいボフの条件になります。すなわち、相手をあたかも「自分のことのように」感じることができる感性です。モンゴルだけではなく相撲のような格闘技とは、身体を介して、他者をあたかも自分のことのように受け入れることに他ならないと筆者は考えます。こうした他者への感性は、モンゴルのような厳しい自然環境で運命を共に暮らしていくために、非常に重要なことなのです。

激しい投げ技が決まる瞬間

この他者への共感が「身体を介した」ものだということが、実は大切なのです。よくよく考えてみると、人は他者に共感するときには、自分の過去の身体的な体験を呼び覚ますものです。他人の悲しみをひしひしと自分のことのように感じるとき、自分の身体も無意識の内にこわばることはないでしょうか。それは、自分が悲しみを感じたときに身体に起こった体験を、「追体験」しているのです。喜びも同じです。友の喜びを自分のことのように感じることができたとき、思わず笑顔になり、頬が紅潮するでしょう。動悸が激しくなり、ドキドキするかもしれません。自分が喜んだ時の快感を身体が覚えていて、他人のことであっても「自分のことのように」身体が反応しているのです。

すなわち人への共感とは、「身体を介して」行われるものなのです²⁾。そうし

た意味で、相撲は身体を介した体験を積むことにより、人への共感となりうるのです。これは、最も深い人への共感といえるでしょう。人への「身体を介した」共感の機会、これが「人にとってのスポーツ」の大きな意味です。

さらにモンゴルの伝統スポーツが教えてくれる「人にとってのスポーツ」の意味は、実はもう一つあると筆者は考えています。次の章で詳しくお話ししましょう。

5. 身体ごと受け入れるということ

モンゴルの人々はこのナーダムを一年の内で最も楽しみにしています。相撲以外にも競馬や弓射の競技も開かれ、この時ばかりは国外に移住するモンゴル出身者でさえ、国に戻ってナーダムを楽しむほどです。

だれが大きな力を持ち、素早い身のこなしや巧みな技ができる人物か——見学する村人の関心はここに集まります。遊牧の暮らしでは、大きな力を持ち、巧みに、俊敏に動ける人物が、共同体の運命を握ります。野生のオオカミから大事な家畜の羊を守ったり、馬の調教をするときに馬を制御したり、牛を引っ張って移動させたり、すべてにおいて大きな力と、それを巧みに使いこなせる技と知恵が必要になってきます。誰に仕事を頼めるのか・・・そうしたことを含めて、期待を込めてナーダムを見守っているのでしょう。共同体から排出するボフの身体の巧みさは自分たちの運命を握るのですから。

そのなかで圧倒的に強い力士は、当然故郷の英雄となります。その力強さは、共同体の生命力の強さなのでしょう。我々も大相撲において地元出身力士を応援することはよくあることですが、しかしそれとは比較できないほど、モンゴルでの故郷出身の力士は地元の人々の大きな誇りとなっていきます。

ただ、地元の人々にとって相撲は「誰が強いかわかるだけを見る装置ではない」と筆者は思っています。いくら屈強なモンゴルの遊牧民でも、非力な人はいるはずで、時には人の助けが必要な人もいます。誰が助けを必要としている人か——これを、相撲を通じて、人々は知ることになります。すなわち、誰が共同体の運命をけん引して担ってくれる人か、そして誰に手助けをすればよいのかを、相撲は暗黙の了解として共同体に提示してくれるのです。すなわち相撲を見ている共同体が、ボフのありのままの身体ごと受け入れるのです。い

わば、相撲に参加する男性たちの身体そのものを、ありのままに、共同体が「分かち持つ」ということでしょう。人が共同体に本当の意味で受け入れられるということは、「身体ごと」でなければ成立しないことなのかもしれません。人は一人では生きていけないものですから、人は共同体に身体ごと受け入れられ、またそれを互いに受け入れながら、人と共に生きてきました。その媒体となるのがスポーツなのです。儀礼としてのスポーツとは元来そういう意味をもって、人々の暮らしの中に息づいてきました。だからこそ、人類は誕生とともにスポーツを行ってきたのだらうと思います。共に生きるために、一人ひとりを「身体ごと」受け入れ合う、これがもう一つの「人間にとってのスポーツ」の意味だと筆者は考えます。



土俵がないため、激しい攻防が長時間続くこともある

6. おわりに

モンゴルの相撲の事例をみると、人と共感するために「身体の体験」をし、共同体で「身体ごと」メンバーを受け入れています。すなわち、身体を介して人と繋がりあい、共感し、身体ごと人を受け入れる機会としています。

これが、おそらく人にとってスポーツとは何か？の答えの一つだらうと思います。人はスポーツによって、身体を介して人と繋がりあい、深く共感し、身体ごと仲間を受け入れてきました。人と繋がりあい、深く共感しあうために巧みな動きに磨きをかけたり、身体能力を競い合ったりもしてきました。仲間を受け入れるために、身体を成熟させ、感度をあげる鍛錬や学びも積み上げてきました。スポーツができる限り平等なルールを作り、それを守ろうとするの

も、人と共感しあって、互いに受け入れるための前提なのです。これが身体教育なのではないかと筆者は考えています。個人の体力を単に数量化して比較するだけで終わったり、競技の勝敗に拘泥したりすることとは次元の違うものです。ここに保健体育の学びの一面がみえてくると思います。

スポーツを実践することは、時にすばらしい経験となるでしょう。その実践に加えて、こうした「身体教育」という考え方を参考にして、「保健体育」を深く考え、「学んで」みてはいかがですか？

[註および参考文献]

- 1) 『大辞林』(三省堂、1999年、第2版)
- 2) 詳しくは、波平恵美子『からだの文化人類学』(大修館書店、2005年)などを参照してください。

井上 邦子 (Inoue Kuniko)

2003年 日本体育大学 大学院 体育科学研究科スポーツ文化・社会科学系博士後期課程修了
(体育科学博士)。

1995年 椋山女学園大学 人間関係学部 助手。

2011年 奈良教育大学 特任准教授。

2013年 同准教授。



【研究テーマ】

スポーツ文化における身体論的研究。具体的には、モンゴル国の伝統的なスポーツが、社会の変化によってどのように変容するかについて研究を行っています。特にモンゴル国は現在、グローバル化に強く影響を受けていますが、そうした社会の価値観の変化が身体に関する考え方（身体観）にどのような影響を及ぼすかについて考察しています。

【著者の自己紹介】

ー今の研究テーマを選じたきっかけ

大学院修士課程の学生のころ、一ノ瀬恵という方が書いた岩波新書の『モンゴルに暮らす』という本を、書店でふと手に取り、読んでみたことがきっかけです。

ー休日の過ごし方

最近、家族で弓道を習い始めました。弓道は的を射る武道ですが、しかし先生曰く「的に中てることは、それほど重要なことではないということが次第に分かってきます」との言葉に、弓道の奥深さを感じています。

ーこれから行ってみたい場所

古代のオリンピア祭典競技を行っていた、ギリシャ・オリンピアの考古遺跡にぜひ行きたいと思っています。

ー高校生の時に読んだ本

森鷗外の『舞姫』を読んだとき、涙が止まらず読み進められなかったことを印象深く覚えています。今から思えば、10代の多感な感情を刺激されたのだろうなと思います。

身体教育という考え方 —スポーツ文化からのアプローチ—

著者 いのうえ 井上 くにこ 邦子

2015年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>